
Lost 《ロスト》

灰音 四音

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ロスト
Lost

【Nコード】

N9944R

【作者名】

灰音 四音

【あらすじ】

髪の色から悪魔と呼ばれ続けるダンティ。本当は誰よりも強く、優しいのに……

屋敷の外からなかなか出してもらえないエミリア。外の世界に憧れる彼女は、『歌』を理由に外へ飛び出した……

謎の集団に狙われ続けるシーフ。自身の誕生日の日に目にしたもの
は、あまりにも酷なものだった……

不思議な縁^{えにし}に導かれ、紡がれる物語。今、始まる

ブログ 争いの結末は（前書き）

初めての投稿作品になります。どうでもいい感想や、鋭い指摘等お待ちしています。

あ、でも、優しく指摘してくれるとうれしいなあ、なんて

プロローグ 争いの結末は

狭い小屋の中、僕たちは息を殺して周りの様子を伺っていた。小屋の外には僕らを探し回っているであろう人々の怒鳴り声が聞こえる。

「奴らはどこだ！」

「まだ近くにいるはずだ」

「探し出せ、必ず見つける！！」

激しい足音、剣と剣がぶつかり合う音が耳に届く。……よかった、まだみんな死んだわけじゃないんだ。

この小屋の中にいるのは僕を含め4人。扉の前に2人、部屋の中にいる椅子に僕が座り、その隣に彼が立つ。みな、黙ったままだった。

剣を握る手に力を込める。

ここで手を離してしまつたら、誰一人として生き残ることはできない。

仲間の全てを背負い込むほど、大きな背中ではない。でも！

「ここでみんなを投げ出すほど、僕は弱くなんかないさ……！！」

そう思ったかった。声に出して決意しなくてはいけないほど、自分は弱い。

ポンと、肩に手を置かれた。その手を辿つてのろろと顔を上げれば、微笑んでいる彼の顔が見えた。その笑顔に、僕もわずかながら笑みを返す。

だけど、自分が弱いことを知っているからこそ、僕たちは負けない！

「いいか、最後の一人になつたとしても、諦めるな！ 諦めたら奴らの思うつばだぞ！ 剣を捨てるな、戦い続ける意思を捨てるな！」

「もちろんだ！ アンタについて行くと決めたんだ！ こんな所で逃げるわけ、ねえよ。そうだろ、お前ら！」

扉の近くに立っていた一人が叫んだ。言葉は違うが、残りの2人からも賛同の声が上がった。

ギシ

ギシギシ

「おい、ここは調べたのか！？」

「いや、まだだ、誰も確認していない」

外から聞こえてくるその会話は、ほかの仲間が全員やられたことを物語っていた。そういえば、ぶつかり合う剣の音は聞こえなくなっている。

嘘だと叫びたかった。でも声が出なかった。肩に乗っている彼の手が、強く僕のことを掴む。

「諦めるな」

彼の言葉はそれだけ。

その言葉に三人の表情をそれぞれ見る。笑顔の中から余裕が見える顔だった。

「大將がそんな顔してどうするんですか」

扉の近くに立っていたもう一人が、僕にそう言っただけにやり笑った。仲間たちは諦めなていない。それどころか、士気を挙げ、闘志を燃やしている。彼らのその強い心、見習わなければならない……。思わず、笑みがこぼれた。

「やはりこの中にいるみたいだ、どこにもいない！」

「くそ、

あれは罠か！」

外から聞こえる忌々しい声。僕たちの仲間が勇敢に戦い、死んでいったのか。嬉しく思うと同時に、ぽっかりと穴が開いた気分になった。

思い切り息を吐き、勢いをつけて立ち上がった。溢れそうになった涙を必死で堪えながら。

「いいか、心で負けるなよ！ それから……」

もう一度深呼吸をする。

「絶対に……死ぬな！！」

最後の戦いが、始まった。

1 - 1 黒の悪魔

ラクシアは始まりの入り口

ラクシアの入り口

見つけた者は始まりを見る

始まりを見たら終わりを知る

永久の始まり

永久の終わり

全ての終焉につながる

おかしなオカシナ

ラクシアへ

「え……？ ラクシアに？」

葉が青く生い茂る初夏の頃。日差しは熱すぎるくらい強く、風が心地いい季節になった。

そんな中、突然当主の呼び出しを食らった彼は内心ドキドキしながらこの部屋に来ていた。もしかしたら用済みの烙印を押されたのかもしれないと。

だが、予想とは裏腹に言い渡されたのは、久しぶりの仕事だった。

「私の孫が、行ってみたいと騒ぎ出してな。どうにもうるさいから、諦めて行かせることにしたんだ。」

だが、私の孫は……アレだろ？ 社会勉強ということにして、少し外に出してみようと思ってな」

なるほど、と彼はうなずく。確かにあちこちを歩き回っている自分が会ったことがないほどだ、よほどの世間知らずに違いない。

ナルヴァーグ——正式名称はナルシンク・ボルテン・ヴァーギシン連盟国。三つの大きな島からなる島国で、それぞれの島にナルシンク島、ボルテン島、ヴァーギシン島と名前がつけられている。

ラクシアとは、ナルヴァーグの首都である。首都ともなれば様々なものが集まり、多種多様な人たちと出会えるだろう。だが、ここヴァーギシン島にあるミラディンの地から行くにはあまりにも遠く、海を越えねばならない。何度でも言おう、ここからラクシアは遠すぎる。

「つまりドルイド様、自分が呼ばれたのは——」

「無論、孫の護衛だ。それ以外で呼ぶことはまずなかるう？」

当然のように言い切れ、彼の表情は固まった。否、どんな表情を作ればいいのか分からない、とでも言いたげな表情になっている。

何度も言葉を頭の中でリピートし、やっと意味を理解する。つまり目の前にいる雇い主は、自分がなると呼ばれているか知っているうえで、あえて自分の孫に会わせようと言っているのだ。

風が吹き抜けた。窓の外に見える若葉が大きくしなり、揺れる。目を瞬かせ、目の前にいる当主を見つめる。ゆるゆる、口角が上がった。

「その通りです。そのために自分がいるのですから。この悪魔、お

嬢様に傷一つつけないと、誓いましょう」

恭しく礼をする。

そのときの彼の表情を知るものはいない。

痛みに耐えるような表情を、知る者は、誰もいない。

1 - 2 赤から黒へ手紙です

右、右、左、右、左。

白い廊下を彼は進む進む。かつかつと靴音が大きく響き、自分の耳に届く。とても長い廊下を何度も曲がりながら、彼は雇い主の孫娘の部屋に向かっている。先ほど渡されたメモを見て、今度は左に曲がる。

廊下の途中にある窓からは色とりどりの花と、青く輝く若葉が見える。丁寧に手入れをされている証拠だと、彼は思った。

最後に左に曲がる。と、目の前に空の色を映したような青色の扉が目に入った。……あれだ。

青色の扉の前に立つ。ここがお嬢様の部屋になる。目を閉じて、深呼吸。それからノックをした。

「お嬢様。当主様から、護衛を命じられたものです」

ちなみに当主様とは、先程話していたご老人だ。ここに彼をよこした張本人。

しばらく待っても返事がやってこない。それどころか、風も止んでいるようで音も聞こえない。もう一度ノックをして「お嬢様？」と呼びかける。……返事がない。嫌な予感がした。

「お嬢様、開けますよ？」

宣言をするかのように声を上げ、ゆっくりと青色の扉を開く。

薄い青と白で統一された部屋。空の中にあるような部屋だ。窓にベビーブルーのカーテンはゆらゆらとはためいている。この神秘的な感じがなんとも女性らしいと思う。

うんうん、と頷く。そして頭の中が真っ白になった。

何故カーテンがはためいているんだ？ それは風の流れがあるからだ。何故風の流れがあるんだ？ それは窓と扉が開いていて、風の通り道ができているからだ。

つまり、この部屋はもぬけの殻。

「いつの間に出て行っただろう？」

部屋を見回せば、白い机の上に便箋がおいてあった。風で飛ばされないようにか、インク瓶で押さえてある。置手紙？ それを手に取って、右肩上がりの文字に目を通す。

『おとめなこころ、うみとかやまや、にわかにはなす、おどるわにたち

追伸 この橋渡るべからず』

「乙女な心、海とか山や、にわかにはなす、踊るワニたち……。暗号か何かって言うのは分かるけど……」

正直言つてよく分からない。特に、一番最後の追伸の意味。あれは確か、ジャポンと言う国で語り継がれているイッキウサン《一休さん》の話であつたような気がする。

端がだめなら真ん中を通ればいいのだと言って、渡ってはいけない橋を堂々と渡る、と言う話だつた気が――

そこではつとした。手紙の意味が分かつたのだ。

「お嬢様は、いたずらが好きだつたり？」

その呟きに答えるものは、誰もいない。

1 - 2 赤から黒へ手紙です（後書き）

皆さんは手紙の内容、分かりましたか？ あの間考えるのに一日かかりました。

分かった！ と言う人はぜひ感想で教えてくれると嬉しいです

1 - 3 黒と赤の出会い

お嬢様の部屋を出て、真っ先に彼が向かった場所。それは中庭だった。手入れがされている植木たちは、青い葉をいっぱいいっぱいに広げ、太陽の光を一身に受けている。花壇にも色とりどりの花が咲いているが、植木に比べると雑な扱いを受けているように見えた。さて、いったいどこにいるのやら……。辺りを見回しても誰も見つからない。もしかして間違ったか？

「あなたが初めてよ、ここに来てくれたのは」

頭上から声が聞こえた。見上げれば、太い木の枝に腰掛けている『何か』の影が見える。逆光で何も見えやしない。声からして女性だと言うのは分かるが、太陽に目がやられる。目を伏せ、「降りてきてくれませんか？」と言えば、あっさり降りてきてくれた。

だが、ジロジロと見られている気がする。目がやられてしまつてよく分からないが。

「ねえ、あなたいくつ？」

「あと一週間で16ですね」

「へえー。アタシより年下なのね」

やっと目が元に戻ってきた。ゆっくりと目の前にいる彼女に目を向ける。

くすんだ赤い髪はゆるくウェーブを描いており、それが肋骨の辺りまで伸びている。それが金色の目とよくあっていた。鼻の周りにはそばかすが残っていた、美人なのにもったいない。

「アタシは18。で、名前はエミリア・ドイル。あなたは？」

「自分はダンディ・スカルと申します。以後お見知りおきを」

エミリアは、目の前にいる彼——ダンディを観察するかのようにつめる。

黒い髪は耳の下で切りそろえられ、触りたくなるほどサラサラしている。肌は異様なくらい白く、その中にある紺の瞳が夜の空みたいだと思った。きつと黄色の髪飾りとか似合うだろうと考えていると、ダンディは困ったように微笑む。

「あなた細いけど、本当に護衛でいいの？　なんだか弱そうだわ」

「それはよく言われますね。ですが人数だけでも足手まといになりますから」

「そついうもの？」

「そついうものです」

やっぱり困ったような笑顔のままダンティは言う。

エミリアは知らない、自分の視線が彼を傷つけていたことを。ダンティは知らない、彼女の視線の真意を。

お互いに勘違いをしたまま、黒と赤は出会ったのだ。

1 - 3 黒と赤の出会い（後書き）

手紙の暗号の答えは『中庭』でした！
『、』で区切って行を変えると

おとめなこころ
うみとかやまや
にわかにはなす
おどるわにたち

になります。

そして追伸で端を渡ってはいけないと言われていたので真ん中を通
ると……

おとめ『な』こころ
うみと『か』やまや
にわか『に』はなす
おどる『わ』にたち

ね？ 『中庭』になっただでしょ？

2 - 1 黒の点を辿ってつく先は

「笹の葉さ〜らさ〜。の〜き〜ば〜に〜ゆ〜れ〜る〜」

「エミリア……それは少々時期はずれでは。つい先日終わったばかりですし」

「いいのよ！ その時は何もできなかったでしょう？」

エミリアの歌声が響く草原。周りは家も、木々もないので視界は良好だ。そのためか聞こえてくる音も草同士がこすれる音と、彼女の歌声のみ。そんな中で歌うとは、恥ずかしくないのだろうかとおもったが、自分には関係ないと思い直し、口を挟まないことにした。どうやら彼女は、七夕のお祝いができなかったことが悔しくて仕方ないらしい。その日は荷物をまとめたり、ラクシアまでの道や船の航路を調べたりして忙しかったから、仕方ないと言えば仕方ないのだが。

目の前の子供っぽい主を^{あるじ}みながら、ぼんやりとダンティは思う。確か七夕の日は雨だった。雨の日は織姫と彦星は会えないんだっけ。

「！ ねえダンティ、地面についてる黒いの、一体なんだと思う？」

エミリアが足元を指差した。そこには等間隔で転々と黒い点がついていた。

「なんでしょう？ この先に続いているみたいですけど……」

「この黒い点、辿ってみない？」

楽しそうに弾んでいる彼女の声。

確かにこの点がどこに続いているのか気になる。それに――

（わずかに血のにおいがする。気のせいならいいんだが）

ダンティの返事を待つエミリア。ゆつくりと笑みを作り、それを彼女に向けた。

「そうですね。宝探してみたいでワクワクします」

「ダンティって案外子供ね」

エミリアに笑われた。それはちょっと癪だったが、今はそんなことどうでもいい。

二人は黒の点を辿っていく。

これが、物語の始まり。

失われた物語の始まり。

2 - 1 黒の点を辿ってつく先は（後書き）

あれ？ ダンティ、エミリアの呼び方変わってね？ って思った人は、『灰音 四音の作品全体の番外編』を見ていってください。ちよっとしたネタを入れておきましたw

2・2 赤く染まった白（前書き）

今回死体みたいなのが出てきます。なるべくソフトに書いたつもりですが。人によっては嫌悪感を抱くかもしれません。

「グロイ表現が出て来るんだなあ」と、暖かく見てくれれば幸いです

ではいいですか？

本編をどうぞ！

2 - 2 赤く染まった白

黒い点を辿ってどれほど歩いたのだろうか。日は少し傾き、それだけの時間が経っているんだということだけは分かった。

「どのくらい続くのかしら？」

「飽きました？」

「まだまだ！ お楽しみはこれからよ」

口ではそう言うてはいるものの、少し飽きてきているみたいだ。彼女の足音が平坦になってきている。最初はすごく弾んでいたから、その差が激しい。

風が吹く。鼻につくあのにおい。

血

明らかににおいが強くなっている。やはり足元にあるこの点は、血が黒く変色したものなのだろう。この血の主は、かなりの大怪我をしているようだ。早く手当てをしなければ、出血多量で死んでしまいかもしれない。

その前に、何故こんな怪我を負^おっているのだろうか。場合によっては厄介なことに巻き込まれるかも知れない。

「ダンティ、ダンティ！ 誰か倒れてる……！！」

その言葉で足を止め、黒の点を視線で辿る。するとそこには、赤い海が広がっていた。その中心に誰かが倒れ

ている。うつ、と、隣からくぐもった声が聞こえた。

「エミリア、後ろを向いていてください」

ぎこちない動きで彼女は離れた。それを確認してから倒れている人物に近づいた。

それはエミリアよりもダンティよりも、ずっと幼い少年だった。

2 - 3 赤は惑う（前書き）

今回は前回出てきた倒れている人の怪我を詳しく書いてあります。
見る人が見ると嫌悪とか、吐き気しかないような話になっているか
もしれません。
それでもいいという勇気あるお方はどうぞ

では、本編スタート！

2 - 3 赤は惑う

背中は何かで削られたようにごっそりと肉がない。いや、ひどい切り傷と言った方がいいのか。首の辺りから腰まで、一直線に切られている。ほかには小枝で引っ搔いたような小さな傷や、こけたみたいなの青いあざばかり。訳有りなのはすぐに分かった。

「エミリア、川って近くにありましたっけ？」

視界の隅にいる彼女に話しかければ、大きく肩が跳ねたのが分かった。それから返事が返ってくる。小さくて聞き取りづらい返事が。

「確か、ここに来る途中で見つけた気がする」

「分かりました。その人を頼みます！」

すぐ戻りますから！ 大きな声でそれだけ言うと、ダンティはあつという間に見えなくなつた。彼の背中に伸ばされた手は中途半端に伸びていて、なんだか一層いっそうエミリアを切なくさせた。

エミリアは嫌だつた。生きているんだか死んでいるんだか分からない、変な人間の近くにいることが、堪らなく嫌だつた。気持ち悪い、逃げたい離れたい、怖くて仕方ない。

こんなとき、屋敷の外に出られなかったことが悔やまれた。きっとダンティは、こんな怪我とか見慣れているのだろう。

「それはそれで嫌な気がする……」

早く戻ってこないかしら。呟きは風に乗り、どこへ流れていくのやら。

2 - 4 白を間に

大きな布を川の水に浸し、湿らせる。それをいくつか作って軽く絞って、あの少年の元に戻ったダンティ。

戻ると倒れている少年から5m以上離れている場所にエミリアがいた。おそらくあまりの血の量で、近くに寄れないのだろう。

「今戻りました。彼を見てくれてありがとうございます。何かありましたか？」

首を振る彼女。それから小さな声で「よく分からない」と返ってきた。

先程作った布で傷口を軽く拭いてから応急手当をする。止血と消毒、その後に包帯を巻いて……。

一通りの事を終え、さてこれからどうしよう、ここに置いていくわけにもいかないし、かと言って連れて行くには得体が知れないから危険だと、一人で悶々と悩んでいると、エミリアの鶴の一声。

「彼をちゃんとした病院に連れて行きましょう！」

ああ、自分はバカだ。ダンティは思った。彼女はこうも素直に目の前の少年を心配している。打算的な自分の考えが恥ずかしく思えるほど。

「まずは宿を探しましょう。病院はそれからです」

「分かったわ。宿ならもうすぐよ」

エミリアの明るい声に、ダンティの頬は緩んだ。

3 - 1 黒も惑い

すぐに泊めてくれる宿など見つからないだろうと思っていたのに、これはついていると思うべきなのだろうか。ダンティたちはすぐに、彼らを泊めてくれる宿を見つけたのだ。エミリアもダンティもほっとため息をついた。

ただ、やっぱり全てうまくいくわけじゃなかった。

「ただし、泊めるためにオレからひとつ条件を出そう！ その黒髪にーちゃんを、この宿の護衛を頼みたい」

なんだ、それなら簡単だと、ダンティは少し安心した。もつと訳の分からないことや、無理難題を強いられると思っていたから。それだけならと口を開きかけ、そこで初めて宿の店主の顔をまともに見る。そして彼の目に、好奇の色があるのを知った。

返事をすぐにしなかったダンティを不思議に思いつつ、彼を見る。そして思い出した。確か前に自分の髪の色が嫌いなのだと話してくれたことがあった。もしかしてまだ気にしているのかもしれない。

「ダンティ、アタシなら大丈夫だから、頑張つてちょうだい？」

アタシの言葉が彼の背中を押すならと発した言葉。彼は驚いたように目を見開き、それから「そうですね」と返事をして、彼は護衛の申し出を受けた。

「ンじゃ、部屋は二階の一番奥だから。ほい、鍵。その鍵で隣の部屋も開くから二部屋使えよ」

嬉しそうに鍵を受け取り、「これでちゃんとその子をお医者様に見

せてあげれるわね」と喜んでいる彼女を見て、複雑な気持ちになったダンティ。

きっと自分は、この店主とは上手くいかないだろう、いく筈がない。何故なら彼は、『ダンティ・スカル』を知っているから。

3 - 2 怒りの色は

部屋に少年を寝かせるため、ダンティは先に二階に上がる。エミリアは一階を見回して、内装を楽しんでいた。夜になれば酒場として開放でもしているのか、大きな丸テーブルの周りに丸いすが四つ、そのセットが広い一階を埋め尽くしている。なかなか雰囲気があるじゃないと、エミリアは目を輝かして今度は細かいところを見ようともう一度 みまわ 見回

「なあ、お嬢さん？ ちょっと聞きたいことがあるんだけどさ」

急に話しかけられたせいで細部に目を向けることは叶わなかった。ふうと短いため息ひとつ吐き、店主に続きを促した。

「あれはお嬢さんの『物』かい？」

「ええ、アタシの大事な『友人』よ」

ダンティのことを物といった彼が気に入らなくて、思わず言ってしまった言葉。彼は……ダンティは、アタシのことどう思っているのだろう。そういえば、聞いたことがない。

一瞬呆氣にとられた店主の顔。それからだんだんと彼の口角が上がり、ニヤニヤとした笑いに変わる。

「そっか、お前さんはあれのこと人として見てるって訳だ。いやあ、大したもんだね」

「どういう意味？」

「いんや。ただお嬢さんはすごいな、あんなバケモンと平気で一緒にいられるなんてさ」

「ダンティは化け物なんかじゃないわ！ アタシの大事な友人だつて言ってるでしょう！」

はいはいと言って店主はまともに相手にしてくれなかった。それがすごくイライラとして、少しでも生えている彼のひげを引っ張ってやろうかとも思った。

そこでふと、何故自分はこんなに怒っているのかと不思議に思ったが、友人が貶されれば怒るのが普通だと自分に言い訳をし、まだ何か言っている店主を無視してエミリアは二階に上がっていった。

3 - 3 白の目覚め

白髪の少年を抱え二階に上ってきたダンティ。鍵の番号を確認しながら、部屋を見つけ、中に入っていた。

部屋の中にはベッドが2つと石で出来た暖炉が目に入った。暖炉の中ではぱちぱちと火が燃えていて、部屋全体がとても暖かい。

白髪の少年をベッドに寝かせ、呼吸を確かめる。……うん、だいぶ落ち着いている。

窓際にある椅子をベッドの近くに持ってきて、そこに座る。

「う……ん」

少年のうなり声。はっとしてそちらに顔を向ける。少年の目元がびくびくと痙攣し、ゆっくりと開いていく。ボーっと視線はさまよっていて、何も見ていないように見える。

「大丈夫ですか？ 気分が悪かったり、怪我が痛むとかは？」

「……誰？」

ダンティの質問を全て無視し、少年が問いかけた。無機質な声だった。背筋が凍えるとは、このような感覚を言うのだろうか。

「じ、自分はダンティ・スカルと申します。……えっと、あなたは？」

少年の目が、ダンティに刺さるような気がした。まるで獲物を狙う肉食獣だ。このとき初めて、ダンティは狩られている獲物の気持ちを理解した。

「シーフ・スカイ」

「綺麗な名前ですね」

「そうは思わない」

「自分の名前、嫌いですか？」

「そうは思わない」

「じゃあ、好きなんですネ」

「——そうとも限らない」

意外にも会話が続く、続く。少年——シーフの淡々とした口調はいつまで経っても変わらなかったが。

自分が座っていた椅子を元の場所に戻し、立ち上がる。日は暮れ始め、空の色が変わっている。今から急いで隣町に行けば、医者一人ぐらい連れて来れるだろう。

「おい」

ダンティは足を止め、シーフに向き直った。

「なにか？」

「医者なら必要ない」

「……今、なんと」

「医者なら必要ない、と言った」

「理由を聞いても、よろしいですか？」

「とにかく、必要ない」

これ以上この不毛な押し問答を続けていたら、彼の怪我に障りそうだと判断したダンティは、しぶしぶながらも身を引いた。

彼が必要ないと言い張っているならば、無理に呼ぶ必要もないのだろう。もしかしたら何か理由があるのかもしれない。理由があつて医者に掛れないのかもしれない。それがどんな理由かと聞かれれば困るのだけど。

ため息をつきながらも、ダンティは椅子に座る。彼の容態が変わったときは、医者在必ず呼ばうと決意して。

3 - 4 黒の眩き 赤の眩き

バタバタバタ……

部屋の外から、激しい足音が聞こえてくる。ダンティはイスから立ち上がり、扉の前に立った。こちらには怪我人もいる、しかも彼は追われてる身のようなのだ。彼を追っていた者が、この宿を突き止めたとしても不思議ではないだろう。

息を殺し、足音に耳を澄ます――

「もうっ！ なんなのよ、あの店主――！」

勢いよく開いた扉にダンティは頭をぶつけた。そのときにすごい音が部屋に響いた。『ゴンッ』とも『ガンッ』ともいえない、とても鈍い音が。

痛い……、とにかく痛い。エミリア、どれだけ力入れて扉を開けたら、扉が凶器になるんですか……。口に出さずに、文句をたれる壁にもたれかかり、痛む額を押さえ、とりあえず知り合いでよかったと思ふべきなのか、エミリアに対して怒りを覚えるべきなのかダンティは迷ってしまった。

「あ、ダンティ。どうしたの？ 変なカッコ」

あなたのせいですよ。

でかかった言葉をぐっと飲み込む。

「いえ、ちょっと……」

それより、何かあったのですか？」

「そう、そうなのよ！ ちょっと聞いて――！ この店主ムカつく

の！ あなたのことを物扱いするのよ！！ 信じられない！！」

ダンテイの思考が止まった。

壁にもたれていた状態から、しっかりと自分の両足で立ちなおす。パチツと、薪が爆^{まき}ぜる音が聞こえた。額が痛んでいたことも忘れ、呆然とエミリアの事を見た。

「そんなことで……、そんなことで扉、壊さないでくださいね」

「そんなこと！？ そんなことですって！？ 信じらんない、アナタなに言ってるの！？ アナタは物じゃないでしょう？ なんてそんなひどいこと……」

「物なだけ、まだマシですよ」

エミリアの表情が固まるのを視界の端で確認する。窓辺に近づき、思い切り窓を開ける。冷たい風が部屋の中に吹き込んだ。シーフの白髪が風に揺れる。

「物と言ってくれるだけ、まだマシですよ……」

「アナタは、アタシの大事な友人なのよ……」

互いの呟きは風に乗り、互いの耳には届かなかった。

3 - 4 黒の眩き 赤の眩き（後書き）

長らくお待たせしてしまいました

これからはちゃんと更新していきますので、見捨てない
でください！！！！

3 - 5 白の覚醒

ひとつの部屋の中で暖^{だん}を取る三人。だが誰一人として口を開かなかった。エミリアはダンティを見ないように窓辺にいるし、シーフの意識はまだ完全には目覚めてない。ダンティ自身も気まずさを感じてはいたが、なんと言えれば良いのか分からず、口を開かなかった。

「ん……？」

シーフのうなり声が聞こえた。視線をそちらに向ければ彼が起き上がっているところだった。

慌てて駆け寄り背中を支えれば、「ありがと」と言われた。あれ？ さつきとだいぶ雰囲気違くない？ ベットの隣に立つ。何かあったでもいいように。

「えっと……スカルさん、だったっけ？」

「ダンティで結構ですよ。気楽にいきましょう？」

「うん！」

にぱっと笑う彼。あまりにも唐突に笑われてかなり驚いた。とりあえずちよつと引きつった笑みを返す。くすくすとエミリアに笑われたが気にしないことにしよう、うん、そうしよう。

「ねえねえ綺麗なお姉さん！ 名前なーに？」

ベットの上で飛び跳ねながら方向転換したシーフはそのままエミリアに質問をした。最初驚いたような顔をしたエミリアだったがすぐ

いつもの表情に戻った。

「アタシはエミリア・ドイル。アナタは？」

「ボクはシーフ・スカイ！ 気軽にシーフって呼んでよ。よろしくねエミリア」

「よろしく、シーフ！」

さっきまで気まづかったこの部屋の中は、一人の少年の覚醒により、だいぶ明るくなりました。良かった、良かった。人事のように、ダンティは思った。

4 - 1 黒の護衛 開始

和やかな空気になったことにひとまず安心。もしダンティだけだったならば、いつまでもエミリアとギクシャクしていただろう。自分のことで、彼女を煩わせるなどおこがましい。

今2人は楽しそうにおしゃべりをしている。「シーフって髪長いのね」「そうかなあ？ 普通だと思うけど」「そんなことないわ！こんなに長い人、はじめて見たもの」「そうなの？ ボクの住んでいたところにはたくさんいたよ？」なんとも平和な会話だ。その会話を聞きながら、ダンティはそろりと部屋から抜け出る。もう完全に日が沈んだ。ここの店主と約束した、宿の護衛の時間だ。

静かに扉を閉める。それでもまだ聞こえてくる笑い声に、なんだから自分の頬も緩んでいくのが分かった。

彼女の側を離れるのは護衛としてどうなのだろうとも思ったが、宿の入り口を固めるだけでも、エミリアやシーフに危険がおよぶことは少なくなる。ダンティはそう考えたのだ。

「それに、自分は場違いですしね。いつまでもあそこにいていいはずがない……」

階段を下りる途中の独り言。それは誰にも聞こえなかった。だってダンティ自身が、聴かれることを望んでいなかったから。

階段を降りきると、タバコをふかし新聞を読んでいる店主の姿が目に入った。客は部屋の隅に2組。逆の角に1組いた。それなりに騒がしいなと思い、ダンティは眉をしかめる。

「お、来たか来たか。さっさと仕事に就けよ」

「分かってますよ、うるさいですね」

悪態をつきながらも、ダンティはゆっくりと宿の外に足を向けた。

（さて、面倒な護衛を早く終わらせましょうか）

4 - 2 黒い時間に見つけたもの

完全なる闇が支配する時間、夜。その中に紛れるようにたたずむダンティ。ただいま護衛中だったりする。

だが、限りなく暇だ、暇すぎる、暇で暇でしようがない。出てくるあくびをかみ殺し、落ちてきそうなまぶたを必死に持ち上げる。意味のない護衛に嫌気が差してくる。どうせこんな売れていなさそうな宿屋、誰も襲いませんよ。お金は盗めなさそうだし、美人な女性だって攫えな……ああ、今はエミリアがいましたね。

風が涼しい、ダンティの黒髪を全て攫って、どこかに連れて行ってくれそうなほどの強風だ。ようは、この中入り口に突っ立ってるのはつらい。段々涼しいを通り越して寒くなってきた。

「眠い、限りなく眠い……護衛なんて面倒なこと、なんで自分が――」

カサカサ

茂みが揺れた。

風が吹いているから揺れたわけではないらしい。動きが不自然だった。そう、まるで誰かがそこに隠れているような、不自然な動き。なんだ？ 誰かがあそこで、何かをしている……？

（これでこの店主に何か言われたら厄介極まりない。芽が出ないうちに種ごと……）

ゆつくりと、足音を消して近づく。何が潜んでいるかは全く分からない。狼かもしれない、この寒さで震える子供かもしれない、腹にいちもつ一物抱えた大人かもしれない。

なんにしても、今のダンティにとって面倒なものでしかないのだ。

茂みの近くでしばし耳をそばだてる。……何も聞こえない。ひとつ
息を吐き出し、茂みに飛び込む！

「なっ……！」

そこには、ダンティが全く想像していなかったモノが、転がっていた。

4 - 2 黒い時間に見つけたもの（後書き）

ここまで読んでくださってありがとうございます

Lostが第一章を終えたので、ここで緊急アンケートを行います

灰音四音のユーザーページになってしまうのですが、一読して下さったのなら、そちらのほうに答えてくれるとうれしいなっています

それでは、引き続きLostをお楽しみください

4 - 3 暗い色には、明るい色を

さわさわ……。風が吹き抜けていく。その中でダンティは、呆然と足元に転がるそれを見ていた。これは、一体どうすればいいのだろう。放っておくべきなのか、それとも持ち帰りここの宿の店主に見せるべきなのか。

「おかげで眠気も吹っ飛びましたよ……。面倒ごとを持ち込んでくれちゃって」

もちろん返事はない。それが口を利くとなったら、タナトスはきつと怒り狂うだろうな。

ダンティが見つけたもの。それは――死体だった。

暖かい部屋に流れる和やかな空気。その雰囲気を作るのは二人の青少年だった。シーフはベットに腰掛けて足をぶらぶらさせ、エミリアはそんな彼の姿を微笑ましそうに見ている。

「そっか。じゃあこうやって外に出るのは初めてなんだね」

「ええ。海を見るのがとても楽しみなの。家に飾ってあった絵が、とても素敵だったから」

二人は顔を見合わせくすくすと忍び笑いをした。

こうやって話していると、可愛い弟みたいだと、エミリアは思った。最初はとても怖い人だと思ったけど、こうやって話せばそんなことはなかった。こちらの話を聞いて相槌を打ってくれるし、ころころと変わる表情は見ていて飽きない。こんな弟が本当にほしかったなあ、なんて。

「あーあ。ボク、エミリアみたいな姉さんが欲しかったな」

驚いた。同じように彼も思ってくれていたなんて。そのことがとても嬉しくて、頬が緩む。

「あなたならいつでも大歓迎よ？　むしろ弟になって欲しいくらいなもの」

お互いに見つめあい、数秒経ったあと同時に吹き出した。

暖かい部屋に流れる和やかな空気。ここにダンティがいてくれたら完璧なんだけだな。エミリアは一人、そう思った。

――夜はまだ、続く。

お詫びとお知らせ

今回この作品を見に来てくれた皆様、まことにありがとうございます
さて、今回皆様に大事なお知らせがあつて、投稿させていただきま
した

それは、この小説の更新をお休みさせていただく、ということです

最近ずっと更新できていなかったのですが、それには理由がござい
ます

まず、一つ目

私自信が受験生であること

そろそろ勉強に専念をしなければいけない時期だということは、皆
さんもお分かりだと思います

次に二つ目

私があげている小説ほかの小説と話の流れがかぶってしまうことを
恐れてです

一度にいくつもの連載をしていると、話が混ざってしまうのです

これと似た感じなのですが、三つ目

タイムクラッシュ

時間破壊！？ の連載を集中的に行なっていきたいからです

落ち着いてひとつの作品を仕上げて行きたいと思ったのです

以上が今まで更新を怠っていた理由になります

楽しみに待っていてくださった方、今まで、本当に申し訳ありませ
んでした

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9944r/>

Lost《ロスト》

2011年11月13日21時47分発行